

湖畔記

朝露生

セイラ、ネバタの山中にウエバー湖と云へる避暑地がある。去年八月、余はホテルの洗濯人としてこの仙境に遊ぶことを得た。三十餘人の客と十餘人のホテル員との洗濯ものを、一人にて引きさうけたることとて、毎日十二時間の働きづめ、滞在在四十日、サンデーの休息もせず、奮闘したのであるが、勝地の風光は流石に東海の窮兒を慰め、月に歩する湖畔のながめ、露を踏む曉のそらろあるき何れも思ひ出多き樂を吾に與へたのみか、平生親しまざりし白晝の客も、山中の清風に薰ぜられて、十年故舊の友の如く思はしめた。

またお邪魔にさましたよと洗濯室に入り来るは給仕女のピセーである。時は午後二時、彼等のためには休息のタイムなのであるが、これも分陰を惜しむヤンキーレデーのはしくれ、自らの洗濯ものをもち來りて、わが洗濯場の、隙きたるを窺ひ忙がしく洗ひ乾かし、わがテーブルの片はしを借

りて、昨日の洗ひものをアイオンするのである。吾より二寸ばかりも丈高からんと思はるゝが、動作いとしとやかに、されどアイオンの手先器用に、吾とアイオンの早さを競ふこともある。日ごとのものがたりは吾は彼女が教師ポストンより、近きころ加州に來りたることをき、また彼女の兄はスタクソン市にありて商業を営み居ることも、彼女が加勃氣風を好まぬものから、加勃の女たちと意氣の投合せぬことも知てゐた。どうですへセロは今日御機嫌はい、ですかと吾は笑ちて尋ねたへセロは彼女が好まぬ加勃ッ子の給仕女で、片かげにては彼女を譏誣中傷して快として居る田舎娘である。相異らずツンケンしてゐますよとピセーは眉をひそめる。へセロはこの山中の村里の産れであつて、松林の雷火に焼けたる話より、湖水の魚の大きさまで、わが家のことのやうにものがたる。従つて客の誰彼にも、もてはやされて、けふも砂金が拾へると云ふ澤邊にレデーたちも散歩としゃれてゐる。へセロの眼はいつも高慢の光をやとしてゐる。その口もと人の悪口を云ふために

まらかまへてゐるやうに見ゆる。薄き唇の少しくつき出で、一寸と縷へらんとしてゐるところ、事あれかしとまらかまへてゐるやうだ。その鼻はアメリカに珍らしくも思ひキツて低く、ジューノースの反對に、昂然として上天を見はつて居る。レデーたちの眞似して廂髪に苦心して居るらしいが都ぶりに押しつぶして、意氣な波をうねらすことを知らず、タマレの包を頂きたるやうに丸くつかねて頂上に伸といまらせてゐる。アレでは廂でなくてお寺の丸屋根ですよとはピセーのがらになき悪口である。客と云ふは多くはレデーだちにて、男客はその夫だちなるが極めて少数である。女教師、學生、會社員などのこの一ヶ月を山中に凌がんとして來るは多く、ホームをつくりし富める夫婦などはこゝよりは寧ろ繁華なる夕ホ湖を擇ぶのであらふ。シングルなるレデーだちの、虚榮にあこがるゝ心、せめてこの山中に居る間なりと乙女心の無垢なる昔にかへれかしと希ふのであるが、衣服は山中の質素に甘んずるも、指環に髪に將た耳環に、都會の生存競争はその余勢依然とし

て彼等に附隨して、目に見えぬ波を常に高く揚げてゐる。誰が眼にもノレとゆるされてゐる美人はこのホテルに三人あるうちに、ピセーもその一人であることがピセーのためには不幸の一つとなつた。こと更に黒人の婢女をつれてあるき、對照の拙策にて幾分の勝を占めんとするなど、可笑しき藝當を演ずるはこの國のレデーである。へせロの歡迎せらるゝはこの意味ではあるまいが。ピセーは或意味に於て敵視せらるゝ理由もこゝにある。アー暑を避くるの山中、烟霞深くとざして浮世の音づれを絶つて居るのであるが、淺ましき煩惱のけがれは、この明鏡の湖水でも洗ひつくされぬのであらふか。女はまことの罪深きものよと、吾は憐れにも思ひながらアイオンをしてをる。ピセーはもの靜かに人々の噂をものがたる。話はやはり美しき人の品さだめである。彼のゆるしてゐる美人はマーシヤル嬢で、その次はウキツ嬢であると言ふ。マーシヤル嬢はすでにエンゲージせる情人ありて、こたびもその人と共にこの山中に清遊してゐるのである。嬢はネクタイの新らし

きを好み、日ごと洗濯しスターチシまたアンオンして、自ら純白、雪のやうなるを用意して置く。そのレースの色々なるはボストン生れのピセーに驚歎してゐる。かゝる好尚よりマーシャル嬢もわが洗濯室に日ごとに入出して、面白き話をかたりつ聞きつする。ピセーのかたるところによれば、未來のバスバンドは動物學研究の學者にて、當時大學院にあり、卒業の曉正式の結婚することになつてゐるよし。ホテルは三棟あるうち、二人は相別れて宿つてゐる。林をへだてたる窓と窓に燈影相望みて清き戀草に花さかして居ることであらふ。

ピセーの話の途切れたる頃はいつもマーシャル嬢の忙がしげに入り来る時である。東洋の無骨男を捉へて、新装の相談等批評をもちいだすのには閉口する。マーシャル嬢はピセーより首一ツほど低い。心理の錯覺を利用して、編ものは常に縦てなるを用ゐる。かゝどの高き靴と、瘦がまんの薄着とは、自ら嬢嬢としたる姿を現する、ピセーの洗滌なるに反してこれはまた快瀾が過ぎるほどであ

る。つれ立ちて來ることある彼女のスカートハートも、飛んだりねたりのダンスの眞似や、軒の雀も叶はぬオンシャペリに恐縮して、ネー君、こんな女は洗濯屋に奉公しても、直ぐ免職を喰ふだらふよと、まのあたり攻撃することもある。されどマーシャル嬢は文學を解し宗教を味ひ、三美人中の學者である。講義口調で溜々とのべたてる時は、立ち聞させるへセロなど、何のことを云ふて居るか少しもわからぬのであらふ。晩餐後は吾も仕事を終りて、船を湖心に浮べ、ホテルを晝中にながめることもある。男たちは獲ものを載せて、釣舟ゆるく歸る頃、岸の一群、吾も吾もとハンケチをうちふりて歓迎する。呂尙の妻ならなくに、魚籃をのぞきて、獲もの、少きに大笑するレデーもあるであらふ。男たちのうちに、マーシャル嬢の伯父なる禿頭の男、最も釣道樂に精通してゐるらしい。一日思ひかけなくも晩餐早くすみて、釣人をまつ間、常よりはながく思はれしことがあつた。五六の少女たちは砂の上に腹ばいて笑ひ興じてゐる。

波よする岩の上に腰かけて吾は夕暮の雲をながめてゐた。笑ひさへめく聲に想の宮より逐はれ、ふりむけば女教師連の七八人、中にはピセーにマーシャル嬢も加へてゐる。東洋の戀物語を聞かうではありませんかと稱へいだしたるはマーシャル嬢である。申し合したやうに髪のがきウルサキ動物は、岩のはとりに集つた。よし、御話しませう。ふるき物語は興なきもの、吾はわが實驗のまことの想をかたりませうと吾は昂々然として嘯いた。

一同岩に腰を下ろしてかたれきかんとひしめいて居る。この國での御話ですか、お國であつた御話ですかと例によりてさしで口をするはマーシャル嬢である。想の紳は情の野邊に萌え出づるもの、地上の場所の是と彼れと、あげつらふ限りではないと先づ一つヤリこめて見た。とにかく御話して下さいと、鼻めがねの女教師は云ふ。去年の暮であつたと吾が言了らぬうち、ではこの國のですね一面白いとすつツペコベと云ふはマーシャル嬢、ピセーは眼にも云はせてこれを制し、膝をすゝめてこなたを見つめてゐる。余はかたりはじめた。

愛はまことに神秘である。人の力にて動かすことの出来るものではない。つまりこれは浮世の奇蹟の一つであつて、この大靈力に捉へられたものは、潔く服従して、その蜜の如き甘き情を味ひ、その針の如き心の惱みにも刺されねばならぬ。わが想の糸もつれ初めたのは忘れもせず、十二月十日、十字の街に時雨して、風さへこれに加はりともすれば傘を奪はれんとするを、身をかはして立どまつた。この時吾は大自然の掌に戯弄せられ密と針とを等しく呑まされんとしてゐることを知らなかつた。彼女は人を魅する笑みをもつてゐたのではない。さりとして愁を帯びたる面貌の、人の同情を引きつけずに置かぬと云ふわけでもなかつた。唯その碧の目の底にわが魂を蕩かして、限りなく沈みゆかしむる情の大海原のあることを見る。天地も人生もこの海原の波の泡のやうに思ふた。彼女は伊太利の鄙乙女である。余はかくかたり終りて湖のあなたの岸に眼をそらした。それからどうしましたとの問はかなたにもこなたにも余は再び語りつづける。余はその后幾回となく彼

女と遇ふことができた。うるはしの眼に想の扉開かれて吾はいつも浮世のそとの海原に遊ぶのである。人の身の浅ましきには、吾とても彼女を宿の花として、ひとり眺めばやの希望起らぬこともなかつた。されど思へばこの妙へなる想こそ戀の光だのであつて、わがものにせんと野心あらば、玉は地上に碎け落ちて仕舞ふのであるまいか。吾は今も彼女を戀してゐる。されど再び彼女に遇はんとは思はぬ。そは、彼女は常に吾と共に居るからである。見玉へ諸嬢、星現はれし夕ぐれ空、柳けぶるかなたの岸、彼女の面影の一つではあるまいか、今この足もとの波の音、彼女のさゝやきの聲ではあるまいか。誰れか云ふ、戀にはかやみ多しと、吾は密と針と等しく呑み終りて、唯無明の酔心地に歌はんとしてゐるばかり、苦か樂か自ら知らぬのである。かく云ひ放ちて、折ふし森の樹の間に、かゝれる三日月をうち仰ぎ吾ははゝゑむことを禁じ得なんだ。ホンの麗はしい夢ですことネーとはピエーの歎聲である。だめですそんな空想では、人情の琴が音色をだすもんですかとは、

マーシャル嬢である。手紙は折々くるのでせうネーとは、年若き女教師の一人である。彼女は手紙書くことを知りませうと余は奇語を放つた。衆呆然。彼女は身動きも出来ぬのですと、余はそろそろ覆面をとらんとしてゐるが、聞く方ではあらぬかたにのみ心を運び、どう云ふ身分ですのとかかあいさうですのことか、思ひ思ひの評語を加へてゐる。余は咳一咳した。そして事の真相をさらげだした。みなさんはとうと私の術中に墮りましたナア。私の戀人と云ふのは、血や肉やの危介な荷物ある活きた人間ではありませぬ。オー克蘭ドはサンバブローアベニュー、御存知の店先に街頭の花と歌はれてゐる伊太利少女の水彩畫ですよ。皆々ドット笑ひ崩れた。馬鹿にしてゐますこと。何のことだつたらない。など口々に云ひ罵りて恰も歸り來りし釣舟を迎へ、一同立ち去つた。とうとうわがために擲擲一番せられたのである。ウキツク嬢と云ふは桑港のハイスクールの生徒である。母に伴はれて暑をこの山中にさけてゐるもの、平生不得手なる佛語と代數氣にかゝりて、

朝も自ら早く起き出でらるゝと云ふ神經家、わがランドリーの仕事はじむる頃は、ホテルの廊下に座して、書を読んでゐる嬢を見るは常である。近眼鏡は誰しも好みて用ゐるものにあらず、やむを得ざればなりであるが、圓く太りたる顔に金縁のさらめくは興さむる心地する。寧ろなきには加かぬは云ふまでもなきことながら、ウキツク嬢の瓜核顔には、その近眼鏡よく調和して反つて一種の威嚴を添えてゐる。この國ぶりに髪をつかねて、首筋を徹ふばかりひろく垂らしてゐる。自ら顧みれば結び目までも見得るやふな大きなリボンを用ゐて、しかもそれがいつも黒色であるが、蒼さに近きほど白き面には、ゆるやかなる美を添ゆることが出来る。衣服は學校のまゝらしい。藤色のコートと同じ色なるスカーツ、帽子も羅紗の平凡なるに花一つ造りつけたばかりである。代敷の難問に手傳ひしが縁となりて折々アイオンの手をやめて、+を書き合ふことあるが、南枝に先づ開く白梅の、凜とした匂ひ自らけだかさところがある。ピセーの眼からは人生の春はこれよりとこそは、

急まるゝであらふ。ウキツク嬢は十七、マーシャル嬢は廿一、ピセーは何才なるか疑問である。自らは廿四と稱して居るが、マーシャル嬢は廿四にプラス六であらふと嘲り笑つて居る。何にしるその眼が所謂「芽が崎の眼」の光を帯びてゐる。情海の惨苦を凌ぎ来りし上ならでは、かゝる變化不測なる異光を琢き出されぬのであらふ。獨り窓に倚りて悵然としてゐる時などは、プラス六の言の誤まらざるを知ることが出来る。マーシャル嬢は雨の晴間の海棠ならば、ピセーは散り際の櫻である。憐れなるは女性の美の運命である。一念吾老ひゆくと思ふとき、誰れか戰慄して、前途を畏懼せぬものがあらふか。骨格と筋肉との美的配合の外、タイムの彩加はりてこそ青春の美かがやくのである。醜さへセロとして眉目の間にらうたき匂ひのさまよふあるは、人生の春まだ若き淡雪の消えんとして未だ消えずに居るのであるまいか。この賜は彼もウキツク嬢も等しくうけてゐる。マーシャル嬢もピセーも過ぎこしたかの戀しを想するであらふ。ア、夢の浮世、はかなの人の命、されど永劫の使

命吾等の手にあるものを吾等徒らにゆく春の面影
に別れを惜むべきにあらす、夏の山路の青葉若葉
秋の高根の月の色、冬の窓うつ時雨の音、いづれ
か天地悠久の曲眉豊頬にあらざる。湖畔に開かれ
しこの一頁、吾に或物を讀みつくさしめた。わが
戀人は、伊太利乙女の繪すがたばかりかは。

短歌

○ 渡しよぶ朝川づゝみ雨はれてみどりにかすむ柳影かな
淺井 眞末

○ 破し琴にそゆる輿やる脊かれて薄色袂いろあせにけり
金 森 千代

霞こき花野にそゆる迷ひては行くてはかなき我思ひ哉
朝づく日眩かりせば垂頭てはづかしむかな海家のはな
春なれや涙の谷をそと出で、人にちかづく鶯のこゑ

○ うらゝ日を野に若菜つむ乙女子の裳にもゆる春の炎陽
瀧野 照子

日あたりの障子のやれ間そともれて花の香のせぬ春の
なご風

○ あゝ何を夢見て笑ておはすこと母の御顔を守る夜半哉
美濃 新子
白雲の凝りてなりに、君かとも思へおん頬のあまり清
きに

○ 鈴木 野石

寛の神が呪ふかの様ひゞき來る水車のほとり紅桃のち
る
臙夜に君が奥津城とむらへば我胸みだし花吹雪する
○ 菅原 櫻心

うつむきて秘めし思ひに様も似て奇しき姿の姫百合の
花
草木の美しき花將た鳥のこゑうるはしき春の森かけ
思ひては涙ぐむ君そやにもとに泣きたる日を忘れ得
で

○ 黄金しく菜畑十里うすかすむかなたに白き帆は眠るよ
小野 春香

咒はしき我季の音をたどり來し子規かな青葉ゆふまど
庵かこむ梅か香ゆりて鐘ぞ鳴る野は霞する明方にして
○ 朝倉 みち子

新らしく世によみがへる心地しぬ朝明け清き鶯のこゑ
見るがうちに疑の雲ひるごりてあはれふきしく花吹雪
哉

○ 春の日やふたりの胸に棚引きて物皆清き彩かすみ哉
清水 澄
花くもり曇りし胸の扉をゆりてひやく夕鐘つめたか
らすや

* * * * *
○ 春の宿姉と妹の二人は臙夜かたる
起 雲
花のおはしま

○ 琴抱きて二條を下る少女子の紅梅衣に、
春の雪ふる

（投稿） 伊勢白子局区内 眞宮 宛